

中上人に關係ある寺院・子女・門弟については從來の説を正して新事實を發表して教線擴張の研究に資し、上人と一向一揆とについては上人に煽動の意志が無く其要害の地に城廓構への坊舎を建立されたのは時代の反映に過ぎぬので消極的防禦工事だとして、帖外御文等の眞偽判定をして居る。御影・筆蹟・歌詠・教義の方面は要略に随つてゐるけれども其風采は充分に表れてゐる。上人傳の研究者は勿論眞宗史・教會史・室町時代史の研究者に裨益するところ尠しとせまい。(菊版三三四頁、京都中外出版株式會社發行、價三、三〇)(井川)

### ●南 國 史 話

文學士 川島元次郎著

本書は故川島氏が大正八年より同十一年まで長崎高等商業學校教授として在任中その専攻の見より南國各地に旅行して實地研究を試みられた際の餘業ともいふべきもので永く筐底に遺されて居つたものを今回出版されたものであつて或は紀行に或は考證に氏の得意とせる海外貿

易史に關する博識を以て輕快に書き綴られたもので、鷹島の元寇史蹟、長崎港外の瞥見、長崎と諏訪神社、悲劇「中秋の月」、呪はれたる三百年、聖山は何處、最初に試みた上海貿易、南蠻船を迎へた横瀬浦、南蠻船に見限られた平戸港、平戸のじやがたら文、的山大島の一夜、加藤清正の外國貿易、唐船に絡まる坊津の盛衰、山川と大迫文書、錢五の密貿易船の行方を尋ねて、歌から見た琉球の十六篇の趣味豊かな史話より成つてゐる。文章は流麗で且つ隨所に興味深き圖版を挿入してあつて讀者をして少しも倦怠を感ぜさせない。(菊版三六八頁、東京平凡社發行、價三、二〇)(松野)

### ●朝 鮮 史 話

文學博士 幣原 坦著

本書は著者が専攻する朝鮮史研究の傍に成りたる朝鮮史話にして都べて二十一話より成り、日鮮關係の沿革略は著者平常の研究を平易簡明に略述したるもので、先づ朝鮮史概説と謂つた貌であるが第二話の朝鮮における箕